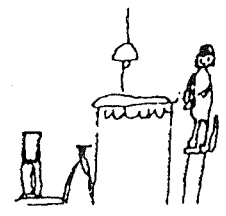


● テーブルふきをしたよ。
よる、いつもおかあさんが
「テーブルふいて。」
というの。

せが、たらないので、いすのうえにのってするの。



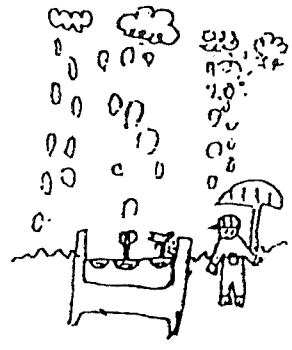
一年 みなみ ひろこ

おかあさんのかたたきをしたよ。
さらあらいと、おふろあらいもしたよ。
ぼくのろうかもふいた。



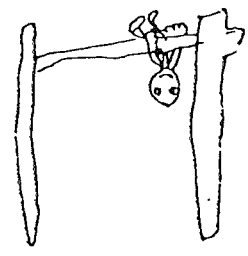
一年 あかさわ ひとし

あめがふっていたとき、ぼくはあきがおが、もう、さいているかなとおもって
かきをきして、ふにいったら、ふたばがさいていたから、うれしかったよ。



一年 よこやま だん

きょう、てつぼうでぶらさがりました。そらとかじめんが、ほんたいにみえた
よ。



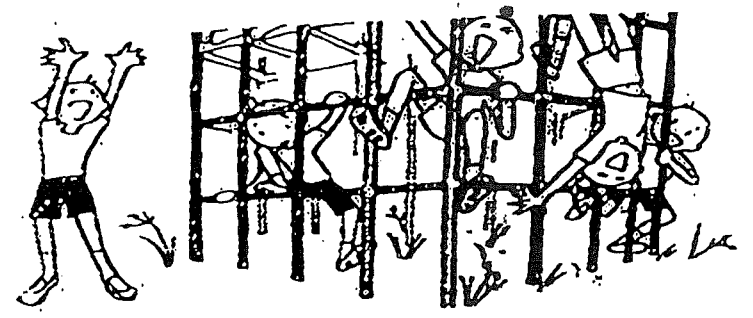
いのこり

(二年生)

まっ田 東一ろう

いのこりいちゃ。たっそめそへんから。先生も
 ちっちゃきびくくるいちゃ。いのこりめんとい。
 ちっちゃいんておれがめんはんはアンのアキモウ。
 いや。たおしいちゃ。いのこり先生と二人キリヤ
 いや。帰。たらマムにたさていおれたことめをら
 先生やけにスィチ入るかやいのこり押ッピチ
 同いんいんひん 一人やしおや。
 先生のいちゃ 先生うるまいいちゃ ちっちゃ
 帰んのおみなるいちゃ もんくたん もんく
 いんたていまい。先生のかーいおわたら
 スキリた。先生ニめん

(京都の杉香先生のクラスの二年生)



せんせい

一年

やほぎ本

あオ

いつもおふんどうのとき、せんせいは、みんなに 手さ
 ありわなめかんと いそがる。
 だけと、せんせいは、手とあそびません。
 あきは、いつも、それを、みて、ソノオ。
 たけと、みんなは、せんせん、気がつていません。
 ああいう、せんせいは、なまけものとおもいます。
 みんなは、とうおもう、ああいう、せんせい

大波 (おろし学風)

怪人は、五さいころのときからいあつとひとつの中へ入て
います。そして、怪人はえんがわのほうで、いもうとはおとうさんと
おかあさんのくちのほうです。

怪人は、ふゆになるとさむいから、いもうとのみゆきのところへ、

足をいれます。はい。たら、ときどきみつかりますが、みゆきがねた

ときいれてもみゆきはわかりません。でもときどきみゆきがねた

むっているまねをするときもありました。そして、みつかつたら、

「あした、おとうさんにゆらたるから。」

といえます。みゆきにみつからないまにきがついたら、怪人のふと

んにはいります。

「ど、おとうさんにみつかつて、

「怪人のふとんにまづすぐねるんやで。」

といって、足をたたかれましたが、なかなか振りません。あさおき

たら、いつも「二じ四五ふん」のようになっています。

おかあさんが、

「かすゆきは、とけいのはりのようによくうごくから、おへそをふ

とんのまん中にぬいつけたら、とけいがいらぬいね。」

といつたので、みんなでもわらいました。

どうしたらまづすぐねられるのかな。怪人の足、いかにでるのかな

怪人の足、みゆきにくつくちからがあるのかためしてみただけと

じやくにはくつきませんでした。

「ねんせいになつたらまづすぐねられるかなとおもいます。

わたしのいもうとは、「あかちゃん」というなまえです。としは、一才
いはんです。

わたしが、あさが「こころでるとき、

「ねえねえ、ばいばい。」

と、てをふつてくれます。が、「こころからかえると、「ねえねえ」といって、

足をばたばたさせてよろこびます。

なんでもすぐさまねをします。いろんなことをするたんびに、

「かっこいい。」

といえます。おかあさんが、

「かっこいいなんかいわんと、しこゆらてほしいわ。」

といっています。

わたしが「んきよをする」と、えんびつをかくしてくれといっています。

わたしが、かしてあげると、わけのわからんことばかりかきます。

すぐ、ゆびをすきます。おかあさんが、ぼんそこをはるとすぐ、ぼ

がします。

みかさんがすきで、みかかんをみるとすぐ

「みんみ。」

というのに、こないだしんどくなつたとき、

「みんみ、やろか。」

といいました。そしたら

「いらん。」とたたまきました。

ちかちゃんも、ぼやくが、「こころくいつたらいいのにね」とおもっています。

「せんせい、ほくね がっこうにくるまで三ねんも まつてんで。」(字上學級)

「せんせいのなまえわすれへんように まいにちねるとき とさ先生 とさ先生 とさ先生」って 三かいうてねるさ。」

おじいちゃん

二年 やなぎ谷 ゆか

おじいちゃんのたん生日に、「なにがいい」と聞いたら、「しずかにして」と言いました。

「子どもの世界」(大阪綴方の会編)

元気とのん気の運動会

三年 杉本 かおる

前から元気とのん気の運動会がやりたいと思っただ。そして、やっとやりました。

さい初にかけっこをやりました。その時、のん気が、もうダッシュ元気は、あまり動かず、そのままじっとしていました。それで、のん気の勝ち!

二回戦を始めたとき、二ひきともダッシュをしました。でも、いきなりのん気がぎやくに走り出しました。そのまま元気がゴールして、二回戦元気の方が勝ちました。

その次に重さくらべで、元気の勝ち!

その次軽さくらべで、のん気の勝ち!

かわいさくらべで、引き分け!

よって、し合は、同点になりました。その後おなかもすいてそうやし、エサをやりました。

二年生のかん字かける

二年 とら團 あやほ

あやほは、二年生にならったかん字は、すこしかける。なにかというと、それは、「毒」と「元」と「茶」と「色」です。

二年生レツツゴー!

かん字がかけると、ことはもすこしかん字でかける。それで、ぜんぶつなげてかくと、

「子どもは、毒に元気であそび、おとなは、茶色のつくえでべんきようだ」
ひらっ、はらく。

「子どもはね、毒の空気をすくってよ」

おとなのせんのうう

「おとなはね、茶色のつくえでお茶をのむ」

「毒のかん字、それに「元」に「茶」に「色」たのしいかん字、おもしろい。」

文を作るよ。

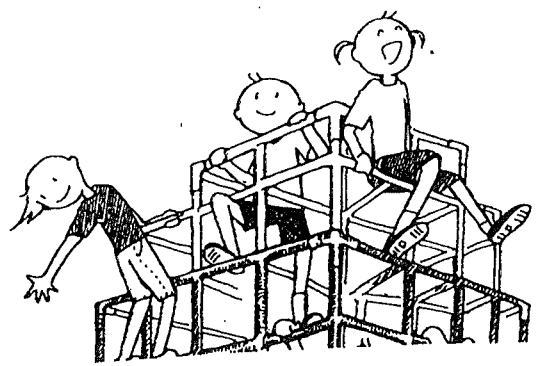
「お茶をのむとおいしいけれど、色えんぴつがみつからない」

「毒がくると元気にあそび」

「元気にあそぶとたのしいよ」

かん字ドリルももらったよ。

毒の空気をすくってよ、おとなは茶色のつくえでべんきようだ、そうなの「心」と「思」のかん字もな



■全国学力テストで今…

今年も全国学力テストが実施された。大阪府教育委員会は、なんと中学三年生の結果を高校入試の内申に反映させると決めたのだ。文科省ですら、それは主旨が違ふといわざるをえなかった。

今、教育現場は平均点を上げることが至上命令になり、戦々恐々となっている。楽しい行事はカット、授業時間を増やす、宿題の量が半端じゃない、しかも学習内容が学力テスト対策勉強で、本物の学力とは縁遠くなっている。さらに追い込まれた教師たちの中には、学力の低い子を休ませたり、テスト時間中にまちがいを指摘し、直させたり等々の不正行為までするという事態が起きている。

かつてこの全国学力テストで教育界が荒廃し、廃止に追い込まれているのだ。なのにまたぞろ出てきて、毎年60億円のお金が使われている。これを先生増員、30人学級など教育諸条件の整備にあてれば、どんなにか有効だろうと思う。

■大本を大事に育てる

学力テスト結果が入試の内申になると、親たちも追い込まれていく。今こそ、頭を冷やして本物の学力とは何なのか、そのために親に何ができるのか考えてみたい。

①なんとと言っても学力の大本になる生活の中に安心感があることだ。自分は愛され守られている、失敗やまちがいをしても見捨てられない安心感だ。親の生活も厳しくなく、やさしくまっはらかないながら、心がけて少しでも努力することだ。

朝起きてきた子に「おはよう」と笑顔で声をかけてやる。顔を洗ったりの歯を磨く習慣がある。「お

腹減った」と言う子においしいご飯が待っていて、ワイワイにぎやかに食べる。「百回勉強せよと言ふよりもおいしいご飯を」と先輩に学んできた。そして「抱いて抱いて『宝物だ』と子どもともに語りかけ、抱きしめてやれ」と教えてもらってきた。これだけで、子どもは愛されていると感じ、心が落ち着くのだ。これ抜きにどんな学力をつけるというのだ。

②こうして愛されて育ってきた子は、人間つき合いが上手になる。学力テストでどんなに良い点

またあしたね ●44 土佐いく子の教育つれづれ ほんまもんの学力を (その1) 親ができること

をとろうが、人間つき合いができない学生たちをたくさん見てきた。反対に人間つき合いができる人は、生きるに値する豊かな人生が送れているではないか。

③人間は言葉で思考し、コミュニケーションし、自己を表現し、新しい世界を創造する。この言葉の力が弱かったら、本物の学力は身につかない。自己と他者、世界を認識し、自分の思いが自分の言葉で表現でき、コミュニケーション能力を獲得することは、人間形成と学力の礎である。そのために親にできることは、子どもの話を

目を見て、共感して聴いてやることだ。さらに、会話のある家庭にすることだ。「早くせよ」「あれせよ」「これせよ」は会話とは言わない。ときには膝に抱いて親の声で本を読んでもやりたい。親が本を読む家庭では、子どもの言語能力の育ちが違ってくるとも言われている。昔の街角では、教科書を音読する子どもの声が聞こえていた。あれはとても大切だ。声に出して文章を読ませたい。

④「知りたい、見たい、やってみたい」という好奇心は、学問の扉を開く。そして、何かに熱中し集中する力が、学問をわがものにしていく。それは、どこで育つか。遊び以外何ものでもない。仲間と身体を使って夢中に遊ぶ体験こそ宝だ。さらに人間は「経験の子」と言われる。一緒に体験することで脳は活性化するという。1歳半で脳は3倍にもなり、5歳になるともう死んでいく脳細胞もあるとか。ところが、人間はいろんな体験を重ねることで脳は活性化していく。毎日仕事で忙しいが、たまには子どもと野山を歩いたり、博物館へ出かけたり、畑でイモ掘りや野菜の収穫をしてみたい。キャッチボールで汗を流してみたい。こうして、親も楽しみながら一緒にする体験が、脳を鍛えてくれるというのだ。好きなことがあり、夢中になれる子は育つのだ。

次回は、ヒトを人にする文化の中で感性を育てること、生きるすべ、段取り能力、生活をプロデュースする力を獲得すること、命を守る健康に生きる知恵をわがものにするごと、家庭学習の習慣作り等について書きたい。

(とと・いく) 和歌山大学講師・大阪大学講師

「勉強しろ、家の手伝いしろ」と口うるさく言われた15歳の少年が、祖母と母親を殺すという事件がまた起きてしまった。他人事ではないと世の親たちは、胸を痛めている。

前回書いたように親の愛情を感じ、人とのつき合いもあり、好きなことのある子は大丈夫。「100回勉強しろ」と言うよりもおいしいうちごはんを」と言うあの言葉を今だからこそかみしめたい。さて今回は…。

■自然や文化に触れる

◎「ヒトは、文化を食べて人になる」ということ。人が人間らしく豊かに生きていく秘訣はここにある。

私自身でできるよい子などとは程遠いあかたれな子だったが、今日の自分があるのは、文化の力そのものだったと思う。ふるさとの川は美しく、山面に映る夕焼けも風にそよぐ草花たちも私の感性を育ててくれた。日々の暮らしの中にあつた藍染の藍の色も人形浄瑠璃の舞台も父の書や棟の水墨画、母の育てていた花たち、そして、たくさん出合った本等が私を育ててくれた。親は仕事に忙しく、またさびしかったらかし、縛られる時間などなく、自由な子どもも時間を生きていた。

■生きるすべを身につける

◎「子育ては、生きるすべをしてみせて、やり方を教え、おまえもできるじゃないかと褒めてやる」と。これも先輩に教えてもらった。いま子どもたちは、家庭で勉強をさせているけれどどうしてか(美際

にはゲームばかりで頭がいたい。家族の一員として、家の仕事を分担しているだろうか。

「片づけろ、手伝いしろ」とガミガミ言うだけでなく、やり方を教え、一緒にやってみてやる。子どもってやりたがりなのだ。でも、すべあきてしまつ。だからこそ、やりたがりを手につく上げて、あきてきたら「この前より上手に布団たたためるな」と励ましていく。料理などは、まさに生活のすべ。手を使い、段取り能力を養う絶好

またあしたね。④
土佐いく子の教育つれづれ
ほんまもんの学力を
(その2) 親ができること

体を動かして遊ぶ。これが難しい。今だからこそ、少しは意識して努力したいのだ。

朝からパンだけの食事、一週間うんちが出ていなくても、親は知らない。夜遅くまで起きてゲームをしていても、親は寝ていてこれまた知らない。ちょっと体調を崩すと薬づけ。ラーメンやファーストフード、外食べったりの食生活。これでは長生きできない。忙しい日々だからいつも立派でがんばる親ではいられないが、これではいけない、少しは努力しようと思えるかどうかだ。

元気で長生きできる子は親孝行。そんな子に育てるのは子孝行。◎最後に「勉強しろ」とカンカンになり追い立てるのは禁物だが、毎日少しは勉強する習慣がつけられたらいい。

一人で勉強部屋ではなく、親が夕食を作っている側の食卓でいい。親の目が届き、安心できるところがいい。「おっ今日は字がていねいに書けてるな」「もう時間割できたの、気持ちいいな」と喜んでおればいい。わからなくて困っていたら「明日先生に教えてもらおう」といおう」と言い、連絡帳に「先生よろしく」と書けばいい。

ガミガミ叱り、泣かせ、暴力をふるって勉強させられた子は、この世から勉強がなくなればいいと思うだけだ。一生懸命勉強させられ追い詰められたエリート少年たちが次々と事件を起こしているではないか。

しかし、その親たちもわが子のためよかれと思い、だがどこかで焦らされ、追い詰められてきたのだ。親たちを競争に駆り立てるいまの教育のありよう、社会の問題こそ問い直したい。

(とよ・いへ) 和歌山大学講師・大阪大学講師

